

## 貧困がスリランカの少女の教育にもたらす影響 ティリニ・ウィジェトウンガ（スリランカ）

スリランカでは、世界的に驚異的な発展を遂げるにつれ、高等教育を受ける女性の数が増加しました。この国では、法学部の学生の80%以上、さらには医学部の学生の50%以上が女子学生です。さらに、公の大学制度で無償教育を受ける女性の数も増加しています。しかしながら、こうした素晴らしい成果にもかかわらず、いまだに教育を受ける権利を奪われている少女もおり、その原因のほとんどは貧困にあります。

スリランカの北中部の州にある人里離れた村で暮らす一家の長女、サノジャの話から、社会的なプレッシャーや経済的な試練が原因となり、若い女性が困難に直面している現状が伺えます。彼女の母親は、経済的な困難が原因で、家事労働者として中東で働くために家を出なければなりません。そして母親は、幼い子どもたちの世話を長女であるサノジャに託しました。わずか12歳であったサノジャは、母親が不在の間、全ての家事をこなさなければならず、加えて、一家の年下のきょうだいたちの世話もしなければならなくなりました。このような状況から、サノジャは教育を受けることを断念せざるをえなくなり、フルタイムで家事をこなすようになりました。また、父親からもさまざまな理由で嫌がらせを受けたことで、サノジャは自分が惨めになり、将来に希望を持てなくなりました。似たような経験をしている少女がスリランカに大勢いますが、そのほとんどは、地方に暮らし、教育を十分に受けず貧困に苦しむ家庭で見受けられます。

スリランカでは、家庭の経済的な負担を理由に、家事労働者として雇用されることを求めて、多くの女性が海外に渡ります。家族を経済的に支えるために、雇用の機会を求めて、若い少女までもがスリランカを出て海外に行こうとするケースも多数あります。こうして海外に出る少女は、見知らぬ土地の不慣れな環境で働く際、経験不足や未熟さが原因で大変な困難に直面します。世話をしていた子どもを殺害したとして有罪判決を受け、今年の1月にサウジアラビアで斬首刑を受けたリザナ・ナフィークの話も、そうした例の1つであり、家事労働者としての経験がないのに、海外に渡ってそうした職業に就いた女性が直面する悲劇的な状況を示すものです。

リザナは1988年生まれですが、家事労働者としての仕事を得るために誕生日を変えるように強制されており、パスポートでは1982年生まれとなっていました。リザナはサウジアラビアのある家庭の家事労働者として派遣されました。働き始めると、彼女には、4カ月の幼児に哺乳瓶でミルクを与える仕事が任されました。リザナにはそんなに小さな幼児の世話をした経験は一切無く、その仕事についても、また、自分が何に直面しようとしているかについても、全く理解していませんでした。彼女が赤ちゃんにミルクを飲ませていると、赤ちゃんの喉を詰まらせはじめ、それが原因でその赤ちゃんは不幸にも亡くなりました。この事件の後、リザナは警察に引き渡され、赤ちゃんを絞め殺したと告発されました。しかしリザナには言葉の問題があり、何が起きたかを説明することもできませんでし

た。また、裁判の時も、弁護士がつかず、彼女を支える家族の同席もない状況で、最終的に、リザナにはその幼児の殺害の有罪判決が下り、その後、斬首刑が執行されました。この事件が言語道断の人権侵害であることを認める人は多いものの、スリランカ政府の努力も徒労に終わり、彼女の苦境に対する同情も集まりませんでした。

こうした話は全て、貧困に起因する女性や少女の惨状を示すものです。特に貧困家庭の少女は、貧困により教育を受ける権利を奪われるだけでなく、自分たちの基本的なニーズを満たすための努力をしようとしても、ジェンダーに基づく暴力やセクシャル・ハラスメントにさらされるのです。こうした少女たちやその母親たちは、家事労働者として雇用を求めて海外に渡らざるをえなくなるのですが、その主な目的は家族が生きていくための収入を得ることであり、また、その多くのケースで家を建てることを目標としています。母親が生活費を稼ぐために家を離れて海外に出ると、今度は、海外でもそして家でも苦しみが待ち受けています。海外で雇用されると、多くの女性はさまざまな形のセクシャル・ハラスメントにさらされます。一方、家で待つ子どもたちも、母親からの世話や保護を受けることなく苦しみます。特に少女の場合、教育を受ける権利が否定され、強姦や近親相姦も含め、ジェンダーに基づく暴力や、さまざまな形のセクシャル・ハラスメントにさらされます。

教育面で素晴らしい成果をあげているにも関わらず、一方で、貧困により、多くの女性や少女が過度に困難な状況を経験しているのです。数の面での減少は見られるものの、いまだにそうした話を日常的に耳にします。こうしている今もどこかでたくさん「サノジャ」や「リザナ」がいるかもしれません。家事労働者として海外に渡った女性について、雇用主やあっせん業者は女性の情報を一切提供しないこともあります。長期にわたって連絡がなく、しばらくして、こうした女性が怪我をした、もしくは死亡したという連絡が家族に入るケースもあります。

ですから、国家が貧困の削減という目標を達成するまでは、教育面での素晴らしい成果だけを誇らしげに語ることはフェアではないのです。